

風文

2023年度 風越づくりレポート



2020年4月に開校してから、学校づくり・風越づくり5年目に突入しました。様々なかたちでわたしたちの「つくる」を支えてくださり、ありがとうございます。

開校時に年少で入園した子どもたちは、2年生になりました。7年生で入学した子どもたちは、軽井沢風越学園を卒業して高校2年生の年齢です。

私たちは地続きの社会でそれぞれ生きています。ひとつひとつの社会、そしてそれを包む社会は多様さにあふれています。「学校はちいさな社会」というフレーズがありますが、風越で過ごしていると、「学校は社会そのものなんだ」と思います。同じ校舎の中で、あちこちでいろんなことがまざりあい、違うことが起こっています。

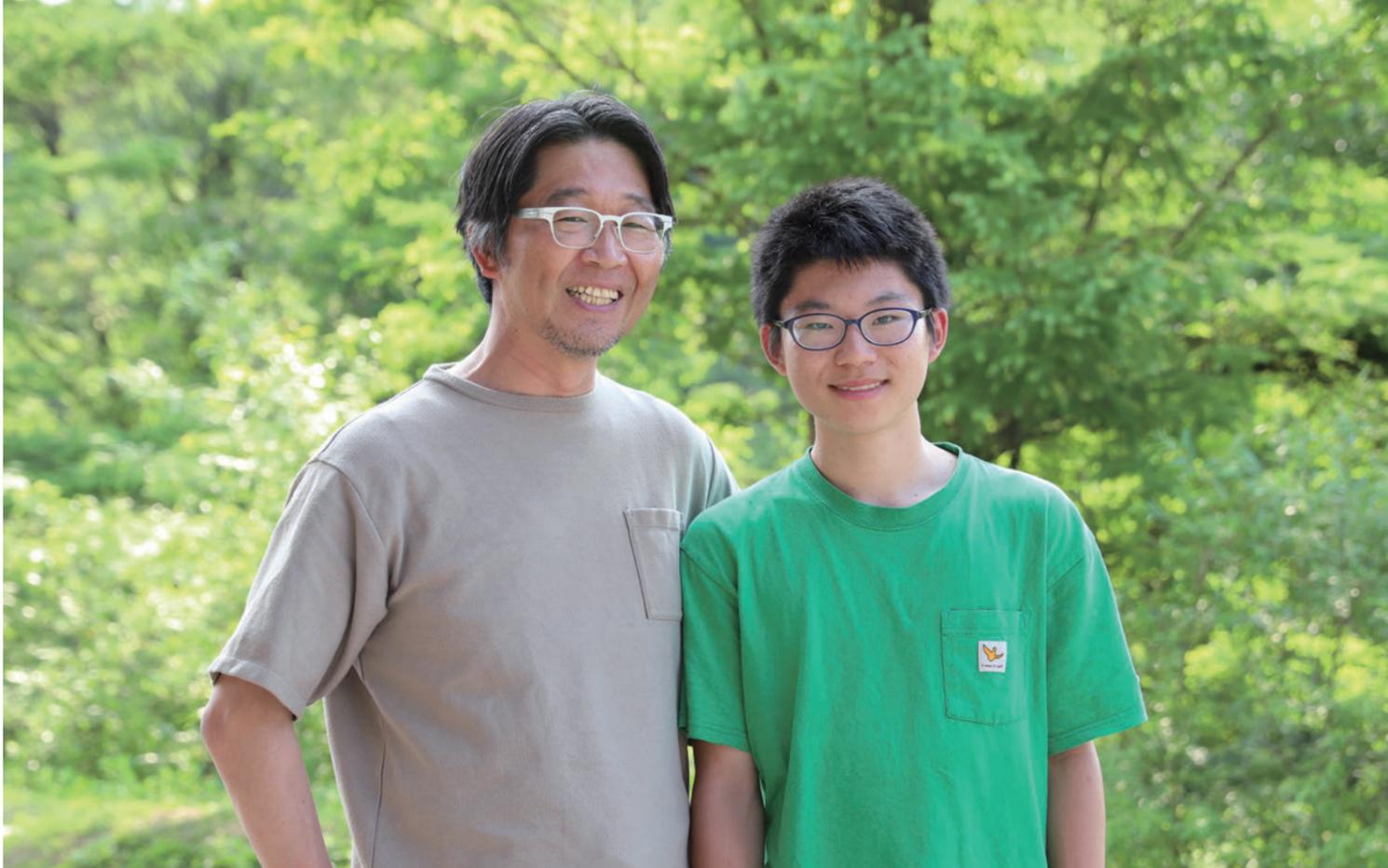
「自由って楽じゃないんだよ」と見学者を案内している3年生がいました。自由は用意されているわけではなく、自分でつくっていく先に自由がある。その道のりは大変だけれど、その中にあるおもしろさを全身で味わう。

私たちはこの社会で、「つくる」ことを通してつながっていきます。学びをつくる、コミュニティをつくる、自分をつくる。

ともに社会をつくっていく仲間として、みなさんとこれからもつながり続けたい。その思いを強くしています。

CONTENTS

01	9年生 シンノスケさんインタビュー	P.4
02	遠藤 綾 インタビュー	P.8
03	岩瀬 直樹 インタビュー	P.12
04	みんなのお気に入りの場所はどこ?	P.16
05	寄付金の活用レポート	P.18
06	2023年度 寄付金額	P.20
07	2023年度 財務会計報告書	P.21
08	9つの寄付金の活用	P.22



5年間、 軽井沢風越学園で学んで、 どう？

9年生シンノスケさん インタビュー

子どもたちにとって、軽井沢風越学園での日々はどう映っているのだろうか。

開校時から通っている9年生のシンノスケさんに、この5年間を振り返ってもらいました。

聞き手は理事長の本城慎之介です。

テーマプロジェクトを通して、 新しい扉が開いた

本城 シンノスケは小学4年生まで公立の小学校にいたんだよね。軽井沢風越学園（以下、風越）に来たときのことって覚えてる？

シンノスケ 山に入った、と思った。小さい頃は横浜にいて、年長のときに軽井沢に引っ越してきたけど、あまり森には入ってなかった。風越に来たら森がいっぱいあって、虫がとれるって思った。だから「学校」というより虫をとりに来た感じ。自分の好きなことができる場所なんだ、と。

本城 はじめは授業があっても、一人で外に出て虫をとりに行っていたよね。

シンノスケ うん。それはそれで楽しかったけど、今となってはもったいない時間の使い方をしていたかもしれない。

本城 どうして？

シンノスケ 一人の時間とみんなとの時間って別々だと思うから。一人の時間だったら今後いくらでも取れるけど、今このメンツでの時間は全然取れない。

本城 もっとみんなと何かをしておけばよかった、ってことかな。もし今、5年生に戻ったら、みんなとどんなことをしてみたい？



シンノスケ みんなと話したい。あの頃は誰とも全然しゃべらず、虫とか魚とか好きなことをずっと一人でやっていたから。それは価値がなかったわけではないけど、やっぱりもったいない感じは強いかな。あと、自分の好きなことはたっぷりできたけど、そのせいで自分の可能性を狭めたかもしれないとも思う。視野がすごい狭かった。

本城 意外。そう思うようになったきっかけは？

シンノスケ たぶん6年生のときの「森プロ」とか「土プロ」のあたりかな。テーマプロジェクト（※1）で、ほかの人たちと半ば強制的に関わりができて、新しい扉が開いた感じがした。

本城 「森プロ」と「土プロ」は虫や生き物の観察もあって、シンノスケの興味関心のあることに近いテーマだったよね。だから自分の好きなことに、ほかの人が関わってきてくれた感じだったのかな。

シンノスケ うん。そのあと和紙をテーマにしたプロジェクトで、チームメンバーともわりと苦勞なく関係ができて。俺一人じゃプロジェクトを続けられなかったと思うけど、人との関わりがあったからできた。

本城 前はグループの話し合いに出ないこともあったけど、そうしなかったんだ。



シンノスケ そう、人と関わるのも楽しいなって初めて思った。何が楽しいかはわからないけど、雰囲気心地よかった。それはやっぱりテーマプロジェクトの存在がすごい大きくて、強制的にコンフォートゾーンからストレッチゾーンに叩き出してくれた。あのときは行きたくはなかったけど、叩き出されて、そのおかげで自分の成長を感じられた。

いろいろな人と出会うことで
自分の好きなことが見つけれられる

本城 マイプロジェクトのほうはどう？水槽プロジェクト（※2）はシンノスケが卒業したら、後輩たちに託されるよね。



**好きなことをたくさん学び、
好きだったこと以外も好きになった**

本城 なるほどね。生き物に興味を持ったのはいつごろから？

シンノスケ 覚えてないけど2歳かな。セミの抜け殻を木から取って、自分の服、全身につけたり、バケツいっぱいセミの抜け殻を集めたりしていたらしい。

本城 過剰だね（笑）

シンノスケ 家でも魚とかヘビとかいろいろ飼っていた。

本城 前の小学校では、どんなふうに通っていたの？

シンノスケ 前の学校では勉強も教室も嫌で、ずっと図書室か理科室にいた。興味のない人の声はうるさくしか聞こえなかったから。風越に来たときもみんなうるさいと思っていただけ、人の声に慣れたというか、自分もうるさい側になったというか。

本城 そうだったんだ。

シンノスケ 母親曰く、俺が2歳ぐらいのときに

シンノスケ それが困ってるのよ。正直に言っていまのメンバーは頼りない。日常の掃除とかはできると思うけど、その他の事務的な作業とか、一般財団法人から助成金をいただいているからその報告書とか書類とか、そういうのは知識が必要で、魚について一番知っているのは俺だから。そういう知識的な面も含めてだいたい不安。

本城 プロジェクトは継続してほしい？

シンノスケ いや、別に継続しなくてもいい。でも放置はやめてほしい。生き物だから死んじゃうのは仕方ないけど、放置して片付けもしません、みたいなのは嫌だな。もし飼うのをやめるんだしたら話し合っちゃんとやめる方法を決めて、やるんだったらしっかりやってほしい。

本城 どう引き継いでいくとか、いまのメンバーをどう育てていくかっていうのは、大きなプロジェクトだね。水槽プロジェクトはシンノスケにとっては単なる魚を育てるだけのプロジェクトではなくってやるわけだ。

シンノスケ 魚だけでなく人を育てるプロジェクトになった。

本城 だいぶプロジェクトの意味合いが変わったね。そういうのも、ほかの学年と関わる機会があったこそだと思うけど、学校全体として3歳から15

「もう人間はいいや」って言ったらしくて。でも、いまはもう人間と復縁した。風越に来たときはどうでもよかったけど、いまとなっては来てよかったって思ってる。

本城 風越のことを知らない人に、風越について説明するとしたら、なんて言う？

シンノスケ 自分の好きなことがいくらでも学べる場所。学ぼうと思えば。

本城 シンノスケは自分の好きなことをいっぱい学んで、どうなった？

シンノスケ 好きだったこと以外も好きになっ



歳までの人が一緒にいるのはどう思う？

シンノスケ たとえばスポーツしているときとかは、正直、体格差が大きいから小さい子が邪魔だなと思うこともあるけど、でもいろんな人がいる環境で育つのはいいと思う。俺は幼稚園の頃は2〜3人くらいの友達しか過ごしてなかったけど、いろんな人がいるのは結構でかいと思う。

本城 なにが「でかい」んだろう？

シンノスケ 俺みたいな変人もいることで、自分の好きなことが見つけれられると思う。趣味があったほうが絶対楽しいから。

た。その結果、精神面で成長した気がする。入った頃はただのクソガキだったけど、4年経って少しはマシになったかな。



他者との関わりの手前で、自分自身の興味・関心とたつぷりと関わる。自分自身の興味・関心をずっと掘っていくことで、他者と出会う。その出会いを通じて、自分自身と出会い直す。

「わたしをつくる」ってそういうことなんじゃないかな。彼が、どんな「わたし」をつくり続けていくのか、これからも話を聞いてみたいな。（本城）

（注釈）

※1 スタッフからテーマを手渡すプロジェクト。「森」と「土」を題材にしたテーマプロジェクトは2021年実施。

※2 水槽プロジェクトはシンノスケが5年生のときに始めたマイプロジェクト。校内で魚やエビ、カニを飼育している。

軽井沢風越幼稚園
園長

遠藤 綾
えんどう・あや



「自然の一部としてのわたし」が育つ場所

軽井沢風越幼稚園では、子どもたちは雨の日も、雪の日も、一日中ずっと野外で過ごしています。豊かな自然のなかで過ごす子どもたちの姿を、園長のあやさんはどんなふうに見ているのでしょうか。（インタビューー 古瀬絵里）

——最近、幼稚園はどうですか？

今年、2年ぶりに校舎前の庭から森に活動のフィールドを移しました。集いも幼稚園61人みんなの集いから学年グループの集いへ、という流れがあることによる変化もあって、遊びもコミュニケーションも変化してきていると感じます。

これまで記録やエピソードを共有しながら、スタッフみんなで議論を重ねてきて、やっと「大事にしていることってこういうことかな」という実感も、実践の中で掴み始めている感じがします。

——スタッフの話し合いでは、どんなことをしているのですか？

「自然の中で子どもの何が育っているか？」を問いとしてまとめた子どものエピソードをもとに、みんなでディスカッションしています。その



中で、子どもの見取りや大事にしていることが自然と共有されてきていて、みんなのものになっていっている感じがあります。学年グループごとに閉じられず、スタッフみんなですべての子どもを見られるようになっていく方向へ少しずつ進んでいきたいです。みんなですべての子どもを見られ

るようになっていくと、子どもにとってはいろいろな大人と関われるので活動の選択肢が広がっていきますし、大人にとっても互いに任せあうことができるようになって、個々人の専門性をより発揮できるようになっていきます。

活動するフィールドを校舎前の庭から森へ移しましたが、その判断も子どもの姿をみながら語る時間を積み重ねた結果、起きたことでした。



——活動フィールドを森に移して、どんな変化がありましたか？

森の中で過ごすようになって、遊びの内容も時間の流れ方も変化してきていると感じています。森は毎日姿を変えていくし、わからないものだらけ。

例えば、森の中で、姿の見えない動物の痕跡や鳴き声に出会ったり、不思議な植物や虫に初めて出会う中で、「これなんだろう？」「こうするとどうなるかな？」と自分の感性と感覚を通して、「『みたい』『これはこういうものだよね』と自分で意味を見出していく、そんなことが起きています。そんなとき、私たちスタッフは「へえー」とか「おもしろいね」と、わからないことをわかちあいながら隣にいるんですが、そうした応答もそこが森の中で、私たち大人にとってもわからないことだらけの環境だから生まれてくるものなのかもしれないと思います。

森とともにある暮らしの中では、主導権は自然の側にあるので、思わず新しい世界に出会ってしまう、ということが度々起こるところも魅力なのですが、それゆえに冷たいし、寒いし、濡れちゃって気持ち悪い。そんなどうしようもない状況に身を置くこともよくあります。でも、その状況をそのままにできる力や、想像力で乗り越えていく力を子どもは育んでいるのではないかと思う場面にもよく出会っています。

また、校舎前の庭で過ごしていたときよりも、



時間がゆっくり流れるようになりました。たとえば遊びと遊びの間に、木陰に座ってぼーっとする時間が生まれたりして、そういうとき子どもたちは自分自身と一緒にいる感じがします。そんな名前がつかないたっぷりとした時間も大切にしたいと思います。



——自然の中での保育を大事にしている理由を教えてください。

この前、ある年少の子が着替えるときに、なかなかズボンを履けなかったんです。着替える場所に置いてあるパレットが太陽で温められて、足で触るとすごく温かいんですよ。その足裏の感触に

15歳のつながりがあることって、お互いにとって、いい影響があるんじゃないかと思えます。幼児にとって、おっきいお兄さん・お姉さんは憧れの存在であつたりしますが、中学生にとつても「3歳のこの子に伝わる言葉って?」とか、「一緒に楽しく遊ぶにはどうしたらいいのか?」と考えるのは面白いことだと思いますし、幼児のまっすぐな姿をみてこんなふうに表示していいんだ、とほっとすることもあるんじゃないかと思えます。



惹き込まれていて、ズボンに気持ちが悪くない。しばらくすると、その子が足に「水かけて」って言ったので、私は空気のジョウロに水を入れて、その子の足に水をかける振りをしたんです。そしてたらちよつとズボンに足を入れて、足の指がズボンの先から出たときに「ニョキ」って言いながら、私の顔を見て嬉しそうにしていたんですね。自分と植物を重ねているその子の姿に「自然の一部としての私」という感覚が、その子の中にあるんじゃないかなと感じました。

人との関わりのなかで「わたし」が育っていくということも大事なことでけれど、私は「自然の一部としてのわたし」という感覚があれば孤独になりようがない気がするんです。孤独になりようがないとしたら、そんな子ども時代は幸せなんじゃないかと思うし、大きくなってからもその感覚があれば幸せに生きられるんじゃないかなって。自然の一部である、という感覚がこの風越の森で過ごした幼児期を通して育まれていくと嬉しいな。それが、私にとって、自然の中での保育を大事にしたい理由かなと思います。

——幼稚園だけでなく12年間という時間軸については、どう感じていますか?

12年間、一人の子どもの育ちを見届けられるってすごいことだと思うんです。この間も卒園して1年生になった子が、しょんぼりしていたのを見かけたので、隣に座って「最近どう?」っておしゃ

——2022年からは、小・中学校の子どもたちも一緒に、循環する環境づくりに取り組んできましたね。今年は何なことをしようと考えていますか?

森と校舎の間にある庭で、子どもたちと一緒に水が循環する小川をつくったり、畑をつくったりしてきましたが、この庭をもっと多様な生き物が生息できる環境にしていきたいです。

いま取り組んでいるものとしては、主に中学生の子どもたち数名のマイプロジェクトで、野外で煮炊きするためのかまどづくりが進行中です。泥を掘ってきて、その泥から日干しレンガを150個つくって…と大変な作業ですが、かまどで美味しいごはんをつくるためにワクワクしながら進めている子どもたちを見ると本当にすごいなあと思います。

そんなふうには、お金に頼らなくても身近にあるものでつくることができていることを身体を通して知っていると、とても豊かなことだと感じます。広大な森がすぐそばにあるという風越の環境をもっと活かしていくことができたらと思いますし、生き物にとつても人間にとつても心地よい環境を子どもたちとつくっていききたいです。

——最後に、これから楽しみにしていることがあれば教えてください。

学校は20年後の社会だと思うので、あり方や仕

べりして。そんなふうには、卒園してからも関わり続けられることはとても幸せなことだなと感じます。



通常、幼稚園だと3年間しかないので、卒園までこんなこともあんなことも、という気持ちになつてしまうことがあると思うのですが、風越の場合は焦らず子どもを中心に、長い時間軸でその子のことを見られることもありがたいことだと感じています。

加えて、12年間のつながりって、その子の時間が12年間積み重なっていくという意味と、3歳と15歳の子どもの交流が起きるといって12年間のつながりという意味もあると思うんですけど、3歳と組みも含めて、子どもを真ん中に「つくる」を楽しみたいですね。とても難しいことですが、それが私たちがチャレンジしていることだと思えますし、迷ったら子どもに耳を傾ければ、自ずと導かれていくのではないかなと思っています。



子どもが真ん中である「J」を 忘れないように

「ゴリさん」の愛称で、軽井沢風越学園の学校づくりに奔走している校長の岩瀬さん。開校して5年目のいま、子どもたちはどんなふうに着、そして風越学園はどんな方向へと歩んでいるのか聞きました。(インタビューアー 古瀬絵里)

——最近、小・中学校はどうですか？

全体的に落ち着いてきているようで、安心して学べていたり、ぐっと学びを深めたりする人が増えました。

特に中学生が頼もしく、「つくる」ってどういうことだろうか？という「大切にしたいこと」に対して、大人と同じ問いを持ちながら過ごしているなど。この間もある生徒がオフィスに来て、「アウトプットデイをみんなで作るって言いながら、そうならないと思う」って訴えにきたんです。「結局アウトプットデイは子どもだけがやって、大人は急にその日だけ「先生」になって、子どもたちが見世物になっている感じがする。「一緒につくる」ってそういうことじゃないと思う」って。スタッフもエントリーして一緒にやってほしい、



軽井沢風越学園
校長

岩瀬 直樹
いわせ・なおき

という要望だったんですが、すごいこと言うなと思っていましたね。「一緒につくる」ってどういうことかという問いを真っ直ぐに持ちながら、「自分たちがつくっているんだ」という意思と手応えを持って過ごしているなど実感しました。



最近、9年生は「同学年だけで過ごす時間が多い」ことに違和感を抱いているようです。もちろん9年生同士も楽しいけど、ほかの年齢の子たち

と過ごす新しい価値観に出合えるから自分が広がっていく感じがするみたいで。「ゴリさん、なんとかしたい」と言うので、それなら「ほしい」を聴き合う機会をつくろうと、夏休みにスタッフと一緒にこの3ヶ月を振り返る日を設けることにしました。

こういう、子どもたちの「自分たちでつくりたい」という気持ちを大事にしたいと思っています。学校づくりを始めた頃は、理想の学校の形があると思っていましたが、最近、そんな理想の形なんてないと思うようになって。よりよい学校にしたいと思っている人や、自分たちでつくっていきたいと思っている人が集まって、その意志を手元に持ちながらつくり続けている状態が、たぶん「いい学校」なんだと思います。

——子どもたちの「自分たちがつくり手である」という意識は、どうやって育つのでしょうか？

スタッフが子どもと対等であるから、その中で自分の「やりたい」が否定されないとか、声をあげたらスタッフがそれに乗ったたりとか、その繰り返しで育まれていると思います。あとカリキュラムの真ん中にプロジェクトがあるのも大きいです。週10時間ありますからね。自分の問いや「ほしい」からつくる学びが中心というのは、圧倒的に大きい。

あとは、1〜9年生で過ごす「ホーム」の時間



が、今年は毎朝45分たっぷりあるので、自分たちでどうやったらいいコミュニティになるか、悩みながら試行錯誤しています。過ごし方は日によってちがって、遊んでいるホームもあれば、困りごとを相談しているホームもある。その試行錯誤の繰り返しの中で、「いいコミュニティは誰かがつくってくれるわけではないんだ。自分やコミュニティの変化は、一人ひとりの手の中にあるんだ」という手元感を持ちながら歩みを続けているように見えています。

—— 今年の新たな取り組みとして、1・4年生がまさりあって学んでいますね。

スタッフから「風越はまざるこの価値を大切にしている、1・4年の子たちがまさったら可能性が広がると思うからチャレンジしてみたい」という提案がありました。待ってました！って嬉しかったですね。3、4年の頃って、自分の見ている世界がすべてで、お互いぶつかりやすい時期です。でも1、2年生と一緒にいると、比較への意

識が薄まることで自由になり、つくり手感覚が育っているみたいです。この前もスタッフがいないときに、3、4年生が「任せといて」としっかり自分たちで仕切っていました。かといって上下関係があるというより、お互い刺激し合っている感じ。例えば1年生と4年生が対等にやりとりしながらアウトプットデイの準備をする、というのも日常の光景です。

異年齢で過ごすことよさに、比較からの自由



ると不安になることもあるけど、大人がその点の不安を解消しようとする、たいていロクなことが起きないんですよ。そういう時期もあるよねって面白かったり、不安でもぐっと我慢したり。どんなときでも「自分はちゃんと大切に思われている、そのまま受け取ってもらえている」と感じてもらえれば、あとは自分がある方向に歩いていくと思っています。

否定をしないことも大事。子どもの「～したい」を尊重したり、困ったときに頼られる存在でい続けたり。結局、それを引き受ける大人側の覚悟ですよね。そういう人が育っていく力を、誰もが信頼してられる学校にもっとなってほしいなと思うし、そういう基盤がこの開校後の4年間でようやくできてきたかな。

—— 今年、チャレンジしていることは？

「うろろろ風越」は大きいチャレンジですね。保護者と終日、学校をうろろろして授業を見たり、子どもたちに話を聞いたりしながら、「子ども時代に必要な経験ってなんだろう」をみんなで考える会なんですけど、今年は毎月1回やることにしました。ちょうど昨日もやったんですけど、すごくよかったです。ずっとモヤモヤしてたんですけどね。でも、保護者のみなさんとたっぷり話ができ、出会い直して本当にいい時間でした。

途中で中学生が来て一緒に話す時間もつくりました。ある保護者が「こういう自由な学校で過ご



したあとに、一般的な学校に行ったり社会に出たとき不安じゃない？」と聞いたら、その子は「別にここでの自由って楽じゃないから」って答えたんです。「自分で決めるとか、自分でやるとか、全然楽じゃない。だから、ここでないとできないことなんてないと思う。もしちがうと思ったらその場を変えようとするばいい」と言って、いやほんとその通りだな、自分次第だね、って。環境は変えられなくても、自分がそこにどう働きかけるかは自分の手の中にあると知っている。失敗も含めて自分で決めるから、その結果は自分に返ってきて、でも自分が動いたら何かが動きます、そ

があるといます。ずっと同じ年齢の人という、早い・遅いとか、できる・できないとか、比べがちですよ。でも年齢が異なると違うことが当たり前で、比較の視線が薄くなる。それに全然ちがう人がまわりにいると、自分の輪郭もはっきりしてくる。ちがってもいいという安心感や、その人らしくいられる居心地のよさも生まれる。それが当たり前にある環境は豊かだと思えます。

以前、見学に来た人が、中学生に異年齢のよさを聞いていて、ぼくも近くで聞き耳を立てていましたよ。そしたら「同級生だと流行りのこととかノリを合わせる人が多いけど、幼稚園の子とか見ていると、めっちゃくちゃ自分を生きているじゃないですか。ああいう姿を見るとすごい刺激を受けるんですよ」って答えていました。確かに年齢が上がれば上がるほど、自分を制御したり抑えたりするけど、でも自分らしくありたい。そういう葛藤のなかで、自分らしく生きている幼児に刺激を受けている。だからただ年上が年下をケアするって一方的な関係ではなくて、お互いに刺激を受けあっているようです。徹底的に違いの中にたっぷりいること。子ども時代に最も大切な経験の一つです。

—— 12年間の学びをどんなふうに捉えていますか？

人って長い尺の中で伸びていきます。点だけ見

のたくさんの積み重ねの中で得たつくり手感覚をこの子は持っているんだなと。

だから本当に、大人が邪魔しないことって大切だなって思います。僕自身も子どものためと言いながら、自分の不安を解消するためだったことがあるので。いまでも意識しているのは、「子どもが真ん中であることを忘れないようにしよう」って言い続ける人でありたい、ということ。この前も放課後にカリキュラム説明会をやったときに、子どもが誰も聞いてなくて失敗したなって反省したんです。説明の後に子どもたちに聞いたら「もっとこうしたほうがいいよ」とか意見があったかもしれないのに。わかっていてもつい忘れがちなので、子どもが真ん中であることを、もっと意識していきたいですね。





いつも勉強するRoomかなあ。ソファのところが好き。本を読んでもよ。ヒナタ(3年)

浅間テラスにあるピアノのそば。雨が降ってる時が特に好き。階段のところから雨に濡れてる窓を眺めるのが好き。アヤナ・マユ(4年)



図工室と工房。工作するのが好きだから ケイ(3年)

どうくつくらやみのところが好き。死体ごっこかしてる。天井に頭ぶつけそうなところが面白い。森も好き、木登りとかしてる。ソノ・サヤコ・ナナホ・ナル(3年)



ほらあな。たまにゴロゴロしてくつろいでる。あとは、棚のうえとか、そうじ道具入れの中でかくれんぼしてる。アラタ・ケイチロウ・イブキ(5年)



グラウンドが好きだよ、サッカーめっちゃできるから。ハルマ(3年)

いろんなところ、ぜんぶ好きだよ。一番好きなのは浅間テラスのソファのところで、家族ごっこか本読むのが好き。ユイ(3年)

わたしもぜんぶ好きだけど、特にラボ。工作するのが好きだから。マハル(3年)

どうくつのところも好き。嫌なことがあった時とか、ケンカして仲直りの時とかにあそこで話す。もつとくらやみがあるといいなあ。ユイ(3年)



オフィス横の芝生の土手の向こう。友だちとそこでおしゃべりするのが好き。ナギサ(4年)

図工室と技術家庭室。いろんなものをつくれるのが好き。スマレ(4年)

階段裏の壁にポコポコ穴が空いてるところ。赤いカーペットが剥がれるから、「赤いチーズ床」って呼んでるの。ネズミごっこかしてる。かまくらが好きだけど、かまくらがなくなって、すけすけになっちゃった。なんでなくなったの？ライブラリーとラボが好きだー。この校舎つくるのに、いくらかった？100万円くらい？ユイ・マル・カナメ(2年)

みんなのお気に入りの場所はどこ？ どんなふうにご過ごしてる？

※写真・子どもたちのコメント・記載された学年は、2023年度のものです。

寄付金の活用レポート

みなさまからのご寄付によって、わたしたちの「つくる」が支えられています。

▶ 使途指定なし

使途指定なしの寄付金から、78,083,000円を学校の運営に活用しました。

内訳は、スタッフの処遇改善や経常経費に72,083,000円、アドベンチャーカリキュラムの実施に3,000,000円、軽井沢風越ラーニングセンターの研究開発費に2,000,000円、スタッフ育成・研修費に1,000,000円となります。

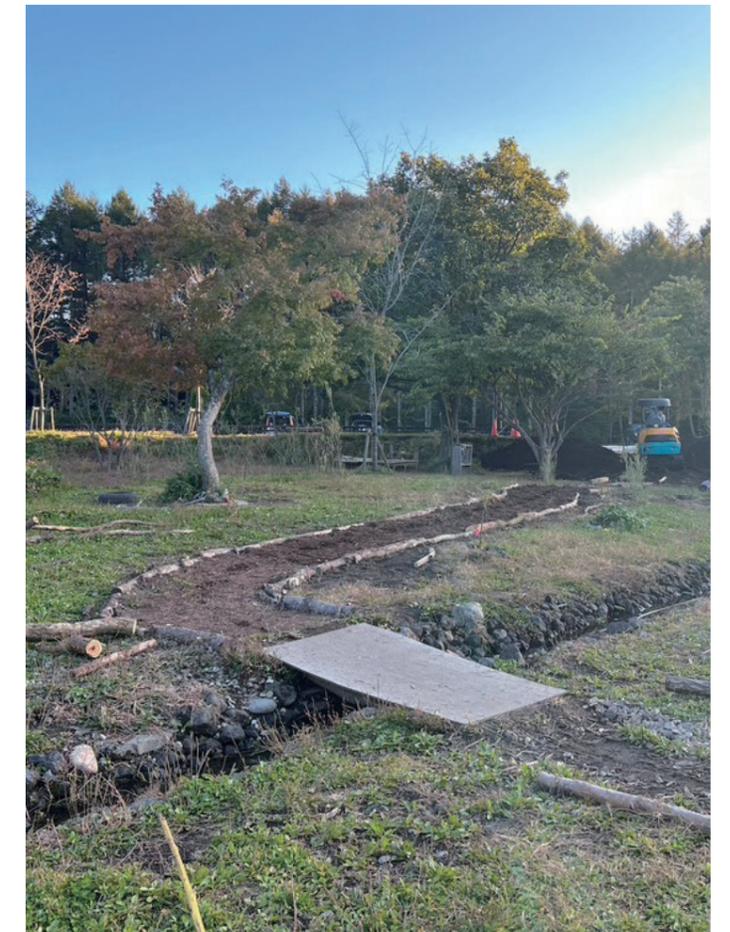
使途項目	寄付金額
スタッフの処遇改善や経常経費	72,083,000円
アドベンチャーカリキュラムの実施	3,000,000円
軽井沢風越ラーニングセンターの研究開発費	2,000,000円
スタッフ育成・研修費	1,000,000円
合計：78,083,000円	



▶ 幼稚園：施設充実

ふるさと納税から2,200,000円、使途指定寄付金から164,453円を活用しました。

幼稚園 寄付金活用金額	
ふるさと納税	2,200,000円
使途指定寄付金	164,453円
合計：2,364,453円	



森と校舎のあいだにある園庭環境の充実を目的として、登園の道づくりや川の補修、馬の力を借りて堆肥をまぜたり、畑を耕す活動を行いました。年少から9年生までの子どもたちと保護者の皆さんとともに環境づくりをすすめることができました。

▶ 義務教育学校：授業料等減免制度

ふるさと納税から10,850,000円を活用し、20名が授業料等減免制度を利用しました。入学金の全額と授業料の一部または全額が免除される制度です。義務教育学校在籍者数の13%程度が利用できるような制度設計しています。2024年度の制度から「2019年4月1日時点から現在まで志願者及び保護者が軽井沢町または御代田町に居住していること」という条件を撤廃し、応募できる家庭を増やすことで、より支援が必要なご家庭に制度が届くようにしています。

2023年度 財務会計報告

2023年度 寄付金額

資金収支計算書

(単位：円)

科目	予算	決算	予実比
収入の部			
学生生徒等納付金収入	206,856,000	204,584,000	98%
手数料収入	2,100,000	3,600,000	171%
寄付金収入	73,000,000	76,692,000	105%
補助金収入	96,358,000	115,750,000	120%
付随事業・収益事業収入	5,071,000	5,754,100	113%
受取利息・配当金収入	0	10	-
雑収入	5,500,000	9,435,750	171%
前受金収入	8,050,000	7,650,000	95%
その他の収入	88,278,461	68,540,392	77%
資金収入調整勘定	-17,200,000	-11,806,414	68%
前年度繰越支払資金	189,186,889	189,186,889	100%
収入の部合計	657,200,350	669,386,727	101%
支出の部			
人件費支出	286,031,000	284,800,886	99%
教育研究経費支出	86,006,210	72,915,778	84%
管理経費支出	50,891,000	47,453,826	93%
施設関係支出	320,000	310,200	96%
設備関係支出	4,540,000	4,300,593	94%
その他の支出	91,665,118	98,751,228	107%
(予備費)	(3,320,000)	/	-
資金支出調整勘定	-34,000,000	-35,225,280	103%
翌年度繰越支払資金	170,067,022	196,079,496	115%
支出の部合計	657,200,350	669,386,727	101%

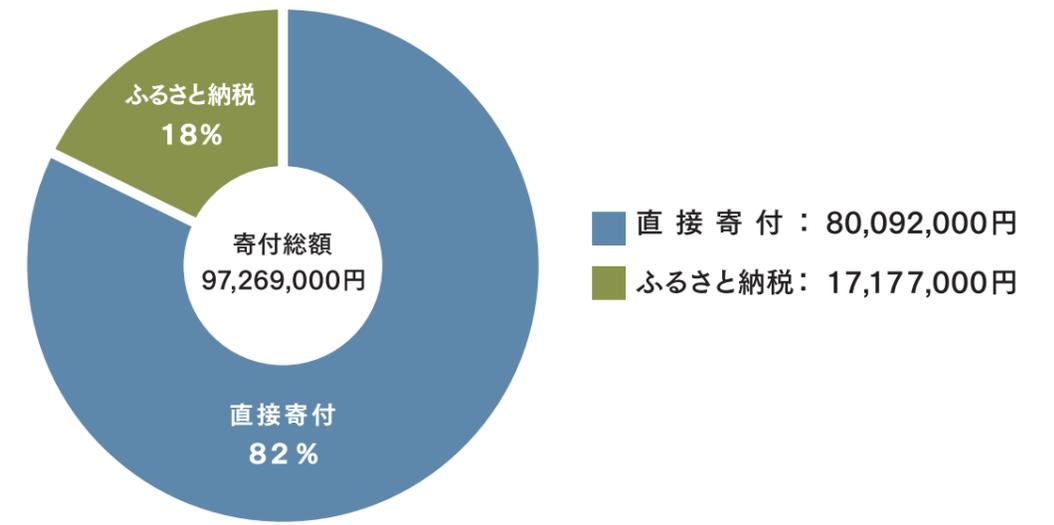
(注) [予備費]の使用額の内訳は、以下のとおりである。
 人件費支出 - 教員人件費支出 3,000,000
 施設関係支出 - 建物支出 320,000
 合計 (3,320,000)

貸借対照表 (2024年3月31日現在)

(単位：円)

科目	金額	科目	金額
資産の部		負債の部	
固定資産	4,004,871,054	流動負債	44,857,877
有形固定資産	3,962,051,690	未払金	35,225,280
土地	1,227,379,913	前受金	7,650,000
建物	2,539,714,575	預り金	1,982,597
構築物	76,020,896	負債の部合計	44,857,877
教育研究用機器備品	50,641,046	純資産の部	
管理用機器備品	1,235,040	基本金	4,417,500,080
図書	66,839,528	第1号基本金	4,417,500,080
車両	220,692	繰越収支差額	-244,622,905
特定資産	40,200,000	翌年度繰越収支差額	-244,622,905
施設設備引当特定資産	40,200,000	純資産の部合計	4,172,877,175
その他の固定資産	2,619,364	負債及び純資産の部合計	4,217,735,052
ソフトウェア	1,858,192		
差入保証金	90,000		
預託金	6,540		
受益者負担金	664,632		
流動資産	212,863,998		
現金預金	196,079,496		
未収入金	16,119,940		
立替金	664,562		
資産の部合計	4,217,735,052		

2023年度に寄せられた寄付金額は、合計 97,269,000円でした。内訳は下表の通りです。



使途項目	直接寄付	ふるさと納税	合計
① 教育施設・学びの環境づくり	2,637,000円	400,000円	3,037,000円
② 授業料等減免制度	1,264,000円	16,777,000円	18,041,000円
③ 探究・プロジェクトの学び	150,000円		150,000円
④ ライブラリーの充実	0円		0円
⑤ スタッフの学び・働く環境づくり	19,140,000円		19,140,000円
⑥ アドベンチャーカリキュラム	0円		0円
⑦ 森と循環する環境づくり	1,000,000円		1,000,000円
⑧ 地域・公立学校との連携・協働	0円		0円
⑨ 使途指定なし	55,901,000円		55,901,000円

ふるさと寄附金は2023年12月末までの金額になります。5%は町に配分されるため、実際の寄付金額は2023年度16,318,000円です。計算書類上は、「補助金収入」-「市町村補助金収入」に計上されています(交付申請した金額のみ)

受配者指定寄付金制度を利用した寄付は、2023年度3,400,000円です。日本私立学校振興・共済事業団に全額プールされており、計算書類上は、「寄付金収入」には計上されません。

9つの寄付金の活用

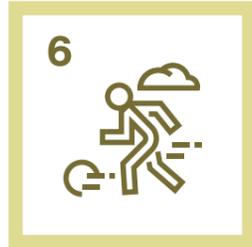


5. スタッフの学び・はたらく環境づくり

「大人も学び続ける存在でありたい」ということを大切にしており、毎週水曜日の午後と月1回の研修日に、スタッフ研修を行っています。こうした研修のための講師謝金等研修費や、それぞれの実践へのサポート、スタッフが安心して働くことができるようにオフィス環境の整備などに使わせていただきます。



風越学園のはたらくを知る - 「問いを立てる」と「学ぶ」



6. アドベンチャーカリキュラム

2021年度から実施している「アドベンチャーカリキュラム」では、3年生以上が日常では経験できないアクティビティにチャレンジします。登山やブッシュクラフトをはじめ、7年生・9年生は「未知の私に出会う」をテーマにしたセルフディスカバリー（長期の宿泊冒険プログラム）があり、一部は保護者負担となりますが、移動費や専門家のサポートにかかる資金を必要としています。



自転車漕いで、未知と出会う

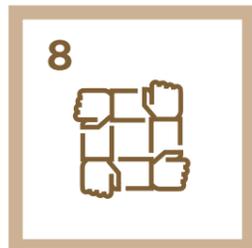


7. 森と循環する環境づくり

水辺の生き物の生息域となる雨水を活用した小川。畑で育てた野菜を食べ、その野菜くずを堆肥化するコンポスト。森から出た薪をエネルギーに、美味しいピザを焼いてくれるアースオープンなど、子どもたちの「～したい」から一歩ずつ、多様な生き物と共にある暮らしの場をつくってきました。人にとっても生き物にとっても心地よい環境をつくる経験を子どもたちの手の中に積み重ねていくために資材費や専門家のサポートにかかる資金を必要としています。



いのちのつながりづくりプロジェクト2 - 水のしくみをつくる

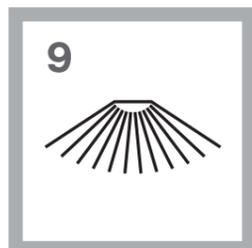


8. 地域・公立学校との連携・協働

2022年5月に開所した「軽井沢風越ラーニングセンター」では、スクールベースの強みを生かした理論と実践を往還した大人の学びの可能性を追求しています。自治体や大学との連携協定に基づいて教員派遣を受け入れたり、公立学校の研究サポートを行います。



ラーニングセンターの現在地と未来



9. 学園の運営資金

用途を学園に委ねるという場合は「用途指定なし」をご選択ください。主に、学園を運営するための経常経費に充てさせていただきます。

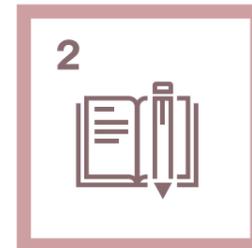


1. 教育施設・学びの環境づくり

学園では、カリキュラムを「子どもの経験の総体」と捉えており、様々な体験を支えるライブラリー、ラボなどの施設整備や環境づくりが不可欠です。これまではラボまわりに映像編集やデザインができるクリエイティブライブラリーを整備してきました。また、近年の光熱費の高騰をカバーする資金も必要としています。



つなぎ、整え、多様で創造的なカオスな場をつくる



2. 授業料等減免制度

義務教育学校で一定の基準に該当する場合、入学金と授業料の一部または全額を免除する制度を運用し、子どもたちの学びを継続的に支えていきます。2020年の開校から2023年度までに累計94名が利用しました。年々利用者が増え、2024年度は過去最多の利用人数となっています。毎年1,800万円の資金を必要としています。



「授業料等減免制度について」説明ページ



3. 探究・プロジェクトの学び

学園では「探究の学び」をカリキュラムの軸としています。子ども一人ひとりの問いが生まれるまでフィールドワークをしたり、ものづくりをしたり、様々なアプローチを通して探究を深めていくプロセスを支えます。フィールドワークにかかる移動費や、子ども一人ひとりの「やってみたい、知りたい、解明したい」から始まる「マイプロジェクト」の種を見つけるために手渡ささまざまな体験、マイプロジェクト助成金（目的や用途を明確にして子どもたちが申請し、審査を通過すれば助成が受けられる制度）に資金を必要としています。



共につくる～テーマプロジェクト「和菓子とみる景色」～



4. ライブラリーの充実

校舎の真ん中に広がるライブラリー。今はインターネットで検索すればすぐに調べることができる一方で、本を通しての新しい世界との出会いを大切にしています。子どもたちの活動に合わせて必要な図書・雑誌・新聞をそろえていくために毎年250～300万円を必要としています。



さがしものはなんですか

「つくり続けていくために」

軽井沢風越学園の大切にしたいことの核は「つくる」です。2020年の開校から、子どもも大人も「つくる」経験を、じっくり、ゆったり、たっぷり、まぎって積み重ねてきました。本気で手間をかけて「つくる」ことに没頭し、ときには不安定さを味わいながら「つくる」ことに挑戦し続けています。物理的なものだけにとどまらず、安心・安全な場をつくる、学びをつくる、自分たちの学校をつくる、コミュニティをつくる、仕組みをつくる、ルールや文化をつくる、わたしをつくる。

軽井沢風越学園は、「わたしたちの未来をわたしたちでつくる」冒険をしています。私たちは、「つくる」ことを通じて、「自由に生きる」ということと「自由を相互に承認する」ということを繰り返し試していきます。そのことは、1人ひとりが幸せになり、幸せな社会をつくっていくことにつながります。軽井沢風越学園の「つくり続ける」挑戦と冒険を、寄付という形で支えてください。

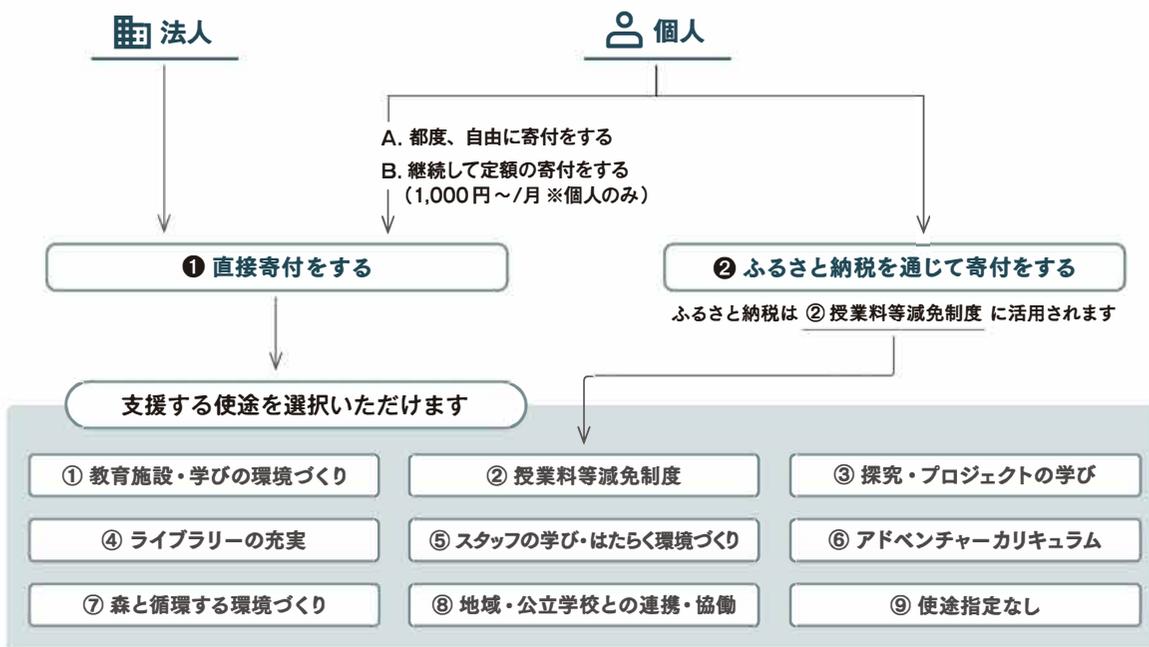
そして、私たちと一緒に未来をつくり続けていきましょう。

「つくる」を支えるご寄付の方法

わたしたちの教育活動にご理解・ご賛同いただき、ご寄付によるご協力を賜りますようお願い申し上げます。

*軽井沢風越学園は、ご寄付に税制上の優遇措置が適用される学校法人です。

*みなさまのご寄付は、所得税、法人税などの控除を受けることができます。



ご寄付のお申し込み、詳細につきましては、ホームページ「ご寄付のお願い」をご覧ください。
<https://kazakoshi.ed.jp/donation/>



軽井沢風越学園

©Karuizawa Kazakoshi School. All rights reserved.
No unauthorized reproduction

無断転載・複製を禁じます

<https://www.kazakoshi.ed.jp/>

風文 2024年10月発行

発行：軽井沢風越学園

インタビュー：古瀬 絵里

インタビュー撮影：日下部 裕美

デザイン：吉澤 妙子

題字：井上 沙織